



「低炭素から脱炭素へ」 「地域ぐるみで新たな挑戦」



2月8日(水) 18:00~19:30 飯田市役所で「低炭素から脱炭素へ」「地域ぐるみで新たな挑戦」という環境イベントが地域ぐるみ環境 ISO 研究会と飯田市が主催、南信州広域連合が共催で行われました。

このイベントは研究会設立20周年記念、飯田市役所 ISO 14001 自己適合宣言移行(2003年1月23日)、飯田市「環境モデル都市」認定(2009年1月23日)を記念するもの。

基調講演は NIT データ経営研究所 渡邊敏康さん、早稲田大学社会科学総合学術院の黒川哲志さんの2人。



渡邊さん黒川さんからの基調講演、そのまとめとして3点が指摘されました。①飯田市には、「地域ぐるみ環境 ISO 研究会」活動に取り組む企業と「おひさま進歩」の太陽光発電事業などに参加する市民がいる。これらの高い環境意識を持つプレイヤーのネットワークが次のチャレンジを支える(社会関係資本)。

②小規模な町村レベルで脱炭素社会の構築の成功例がみられるが、中規模都市で脱炭素社会を構築した例はなく飯田がソーシャルイノベーターとして、新しい社会構造を生み出すことが期待されている。

③ ICTや蓄電システムなどの整備により再エネ電力の安定化とそれを前提とした増産を行うこと、住民だけでなく企業も含めて再エネ電力の地産地消を推進し、余剰分を外部に販売して収益を生むことを確保すべき。これによって、脱炭素社会が経済的持続可能性を獲得し、飯田市版社会イノベーションが実現される(これこそが飯田市の課題)。

研究会代表・多摩川精機社長 参加事業所飯田市役所・市長

基調講演での問題提起を受け「新たな挑戦、それぞれの役割」のパネルディスカッション。パネリストは2人。地域ぐるみ環境 ISO 研究会 関重夫、新代表(多摩川精機株)代表取締役社長と研究会参加事業所飯田市役所の代表、牧野光朗飯田市長(南信州広域連合長)。コーディネーターは基調講演の黒川教授。いきなり「脱炭素へ」の戦略という質問が2人に投げかけられ、緊張した30分を90余人が共有しました。



関代表から、20年間務めた前代表から引き継ぎプレッシャーも大きい一人で頑張らず、これから脱炭素に向けどうすればいいかを皆さんと一緒に考え一つひとつ取り組んでいきたい。個人的にはこの飯田市を外から来てくれる人に優しい街にしたい。その具体的なプロセスのひとつとして脱炭素を考えたい。社会変革をもたらす電気自動車がこの飯田市でスマートコミュニティのモデルシティと挑むことは遠くないと。



牧野市長から、トップランナーの今日の飯田市の環境の取り組みは研究会はじめ地域の成果そのもの。環境に限らず当地域の様々な分野での革新的な取り組みが注目されている。一人の百歩ではなく百人の1歩の継続により進められているのが強み。

環境モデル都市もチャレンジングな目標ながら脱炭素への挑戦も自覚を持ち地域の合意のうえに進めたい。ただレジ袋削減のように脱炭素は地域全体で広めていけば可能だ、と。

地域ぐるみ環境 ISO 研究会 実務者会・事業所見学会



環境イベントのあったこの日、研究会の実務者会が多摩川精機株本社・第1事業所 第2会議室で行われました。内容は、20周年記念式典の感想と「環バック」の贈呈、省エネ診断事業「いいこすいいだ P J」、「南信州いいむす 21」の対応、2016 秋の一斉行動週間の集計結果、2017 冬の一斉行動週間の取り組み、次年度の事業計画、環境関係の賞への応募。会議は約1時間、冒頭に関代表から熱い挨拶がありました。



会議に引き続き、2班に分かれ多摩川精機株事業所内の見学会、敷地奥に整備されている歴史館も説明を受けました。多摩川精機株だけに止まらずこの地域の歴史を歴史館から学ぶことができました。



次号は研究会20周年記念事業として飯田・下川の高校8校を今春卒業する1500人余に贈呈したオリジナルのエコバック「環バック」の特集です。2月13日、飯田女子高校3年生全員への贈呈式を最後に8校全てに出向いて贈呈が終了しました。この「環バック」の企画・発注・作成、配布をプロジェクトとして担当したのは研究会の実務者女性の6人です。この「環バック」を20周年記念事業のテーマ「地域ぐるみ! 次へ!」でどのように仕掛けるのか、何を感じたのか担当の6人の皆さんからの声をお届けします。

【ご意見、お問合せ、問い合わせ】

沢柳俊之(多摩川精機株) 研究会事務局
toshiyuki-sawayanagi@tamagawa-seiki.co.jp
小林敏昭(飯田市役所) 研究会事務局
kobayashi.toshiaki@city.iida.nagano.jp